中学校の校長が意見交わす

受け入れ側は教育の視点を
多様な可能性を検討すべき　岩瀬
校長が主体となって考える　池田
女将の京言葉に子どもが感動　岩瀬
民泊は魅力的、印象に残る　池田
地元の人との触れ合い重要　鈴木

岩瀬「ここまでは修学旅行に行く側の学校に関していろいろ話をしてきた。話題を逆に受け入れ側に移したい。伝統工芸品作りなどいろいろな体験学習が行われているが、まずは、体験プログラムを提供してくれる訪問地側の人たちに何かお願いしたいことは」

池田「先ほど言ったように、作る体験に関してはうまく作っておしまいではなくて、この活動にどういう意味があるのかを子どもたちに分かるようにしてほしい。絵皿作りでも、この絵付けはどういう作業なのかとか、このような工夫をするといいよとか、子どもにそういった話をしながらカウンセリング的にサポートしてほしい」

「東京の近郊でもできるような体験プログラムを宣伝してもしょうがない。東京でできるものと、そこでしかできないものをしっかり分かってほしい」

岩瀬「費用に関してはどうか」

池田「非常に高い体験プログラムもあるが、そういったものには手を出さないので大丈夫だ」

鈴木「金額は気になる。学年主任は旅行会社に旅行代金が昨年よりもいくら高いのかと必ず聞くので差は出ないだろう」

岩瀬「農村漁村体験を提供する人たちにこういうものがあれば、私たちの学校でも行くという提案は何かないか」

池田「まずマイナス面からだが、村おこし、町おこしの意識が強くないか。そうではなくて、子どもたちを大切にしてくれる。体験をしながら寄り添ってくれる。また、そこで教えてくれる。子どもたちが次はどうしたらいいのかと思案していると時にひょいと寄ってきてと、こうこうやるとうまく行くよと、そういった交流をしながらやっていくプログラムであれば、体験する内容は何であっても子どもたちはうれしい」

鈴木「オートメーション的に活動が終わってしまうのでは子どもは物足りない。修学旅行の現地では言葉が違うことがもにのすごく新鮮だ。地元の人との触れ合いが十分にできることが一つの条件になってくる。もう一つは例えば生徒数100人の学年に対して何人が付いてくれるのか。1人、2人がマイクを使って説明をするというのが多か前は西日本豪雨もあったが、この先、何か起こった時に『起こるとは思ってもみなかった』という言い訳は通用しない」

池田「私は、民泊はとても魅力的だと思っている。分泊でやったことが変更先として北陸や東北、北海道などが考えられるが、そこの良さは民泊ができることだ。ホテル・旅館を組み合わせた形から民泊を始めると子どもたちにとって非常に魅力ある修学旅行に発展しそうだ」

岩瀬「ここまでは修学旅行に行く側の学校に関していろいろ話をしてきた。話題を逆に受け入れ側に移したい。伝統工芸品作りなどいろいろな体験学習が行われているが、まずは、体験プログラムを提供してくれる訪問地側の人たちに何かお願いしたいことは」

池田「先ほど言ったように、作る体験に関してはうまく作っておしまいではなくて、この活動にどういう意味があるのかを子どもたちに分かるようにしてほしい。絵皿作りでも、この絵付けはどういう作業なのかとか、このような工夫をするといいよとか、子どもにそういった話をしながらカウンセリング的にサポートしてほしい」

「東京の近郊でもできるような体験プログラムを宣伝してもしょうがない。東京でできるものと、そこでしかできないものをしっかり分かってほしい」

岩瀬「費用に関してはどうか」

池田「非常に高い体験プログラムもあるが、そういったものには手を出さないので大丈夫だ」

鈴木「金額は気になる。学年主任は旅行会社に旅行代金が昨年よりもいくら高いのかと必ず聞くので差は出ないだろう」

岩瀬「農村漁村体験を提供する人たちにこういうものがあれば、私たちの学校でも行くという提案は何かないか」

池田「まずマイナス面からだが、村おこし、町おこしの意識が強くないか。そうではなくて、子どもたちを大切にしてくれる。体験をしながら寄り添ってくれる。また、そこで教えてくれる。子どもたちが次はどうしたらいいのかと思案していると時にひょいと寄ってきてと、こうこうやるとうまく行くよと、そういった交流をしながらやっていくプログラムであれば、体験する内容は何であっても子どもたちはうれしい」

鈴木「オートメーション的に活動が終わってしまうのでは子どもは物足りない。修学旅行の現地では言葉が違うことがもにのすごく新鮮だ。地元の人との触れ合いが十分にできることが一つの条件になってくる。もう一つは例えば生徒数100人の学年に対して何人が付いてくれるのか。1人、2人がマイクを使って説明をするというのが多か前は西日本豪雨もあったが、この先、何か起こった時に『起こるとは思ってもみなかった』という言い訳は通用しない」

池田「私は、民泊はとても魅力的だと思っている。分泊でやったことが変更先として北陸や東北、北海道などが考えられるが、そこの良さは民泊ができることだ。ホテル・旅館を組み合わせた形から民泊を始めると子どもたちにとって非常に魅力ある修学旅行に発展しそうだ」

鈴木「校長が『修学旅行は関西』という考えを改めなくてはいけない。あるのだが、子どもたちはとても楽しんでいた。特に夜に宿の人たちがしてくれる話はとても印象に残ったようで、それぞれの子どもたちが帰りのバスや電車の中で私に話してくれた」

「課題は今、鈴木先生が言った通りなのだが、もう一つは、同じ料金なのだけれども泊まったところによって差がある。終わった後、あそこは一品多かったとか、あそこは肉が出たとか、クレームがあった。そういう情報はすぐに回る。それはどう対処したらいいか分からないけれど、そんなことがあった」

岩瀬「民泊を実施している学校から子どもたちがすごく感動して帰ってきたという話をよく聞く。また、家庭によって対応が違うという話も聞く。逆にそれがいいところかもしれないが」

「今後、民泊をやっていきたいか、どうか」

池田「私は旅行会社を決める時に各社に民泊のコースを一応持ってきてくれと言う。それでプレゼンをしてもらうと保護者代表の反応はいい。今後、民宿を含めて民泊はやっていきたい」

鈴木「校長が『修学旅行は関西』という考えを改めなくてはいけない。あるのだが、子どもたちはとても楽しんでいた。特に夜に宿の人たちがしてくれる話はとても印象に残ったようで、それぞれの子どもたちが帰りのバスや電車の中で私に話してくれた」

「課題は今、鈴木先生が言った通りなのだが、もう一つは、同じ料金なのだけれども泊まったところによって差がある。終わった後、あそこは一品多かったとか、あそこは肉が出たとか、クレームがあった。そういう情報はすぐに回る。それはどう対処したらいいか分からないけれど、そんなことがあった」

岩瀬「民泊を実施している学校から子どもたちがすごく感動して帰ってきたという話をよく聞く。また、家庭によって対応が違うという話も聞く。逆にそれがいいところかもしれないが」

「今後、民泊をやっていきたいか、どうか」

池田「私は旅行会社を決める時に各社に民泊のコースを一応持ってきてくれと言う。それでプレゼンをしてもらうと保護者代表の反応はいい。今後、民宿を含めて民泊はやっていきたい」

鈴木「校長が『修学旅行は関西』という考えを改めなくてはいけない。変更先として北陸や東北、北海道などが考えられるが、そこの良さは民泊ができることだ。ホテル・旅館を組み合わせた形から民泊を始めると子どもたちにとって非常に魅力ある修学旅行に発展しそうだ」

岩瀬「学校が企画しても実施する修学旅行だが、その中で頼りになるのは旅行会社だ。旅行会社にこういうことをやってほしいという要望は」

鈴木「かつて私の学校に教員とのやり取りの最中に表情に出やすい人が営業で来ていた。いつでも笑顔で対応してくれた方が学校としては安心する。修学旅行プランの決め手となるのは、旅行会社の名前よりも、営業の人の力、雰囲気、人柄の方が大きい」

池田「提示型から協働型にしてほしい。その学校の教育目標を知ってオーダーメイドで一緒に作っていく姿勢であってほしい。それから営業担当者が全てをやるのではなくて、教育旅行のコーディネーターが関わってくれたらうれしい。退職した校長を採用するなり、2年先のことを決めてしまくり形にしていけるコーディネーターを育成してほしい」

岩瀬「最後に修学旅行はこうあるべきだというお考えをお聞きしたい」

池田「前年踏襲ではなく、多様な可能性を検討してほしい。修学旅行は本当の意味で学校の教育目標の趣旨に沿ったものだ。さらにこれからもその内容を充実させる。そういう方向性で対応していきたい」

「修学旅行は教育旅行だ。経済活動ではない。だから、受け入れ側の人たちは子どもたちにこういう大人になってほしい、だからうちに来てほしい、そういう視点で誘致活動をしてほしい。もう一つ、中学校は義務教育だ。JRは新幹線の特急料金を半額にしているが、費用的なものについてもっとさまざまなところから援助がほしい。これから日本を背負っていく子どもたちを日本全体で育てようという発想でやっていけたらいい」

岩瀬「修学旅行そのものが今度の新しい学習指導要領の趣旨に沿ったものだ。さらにこれからもその内容を充実させる。そういう方向性で対応していきたい」

「修学旅行は教育旅行だ。経済活動ではない。だから、受け入れ側の人たちは子どもたちにこういう大人になってほしい、だからうちに来てほしい、そういう視点で誘致活動をしてほしい。もう一つ、中学校は義務教育だ。JRは新幹線の特急料金を半額にしているが、費用的なものについてもっとさまざまなところから援助がほしい。これから日本を背負っていく子どもたちを日本全体で育てようという発想でやっていけたらいい」

高校生以下 観覧無料

阪神・淡路大震災の経験と教訓、
防災・減災の大切さを未来に発信

阪神・淡路大震災の再現映像上映や、
被災者から提供された震災資料展示
などを行う災害ミュージアム

2018年8月 新コーナーがOPEN！

津波避難体験コーナー

南海トラフ・首都直下
地震展示コーナー

観覧案内

開館時間
9:30 ～ 17:30、ただし 7 ～ 9 月は～ 18:00、
金・土曜日は通年～ 19:00 ※入館は各 1 時間前まで

休館日
毎週月曜日（月曜日が祝日・振替休日の場合は翌平日）、年末年始（12/31、1/1）

入館料金
大人 600 円、大学生 450 円、高校生以下無料
※毎月 17 日は観覧無料（休館日の場合は翌日）

観覧申込方法
①「観覧予約申込書」を下記からダウンロード
http://www.dri.ne.jp
②必要事項を記入の上、下記へＦＡＸ
FAX078-262-5055

詳しくはHPをご覧ください
http://www.dri.ne.jp/

阪神・淡路大震災記念
人と防災未来センター
〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通 1-5-2
TEL078-262-5050（観覧案内）